文化

歴史を語る建物たち 庄内編（第15回）

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成８年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

アトク先生の館（三川町）

三川町役場や三川町公民館など、同町の主要施設が建ち並ぶ辺りに、「アトク先生の館」と呼ばれる、床面積100坪以上の近代和風建築がある。皇室関係の建築も手掛けた宮島佐一郎が、関東大震災で被災し、庄内に疎開していた際に縁あって設計した建物で、昭和３年に完成した。現在は、町の文化交流館（公民館に準ずる施設）として利用されている。

庄内有数の大地主・阿部家

「アトク先生」とは、山形大学などでドイツ語や農村社会学を講じた阿部徳三郎（1907－1994）の愛称（阿徳＝アトク）である。阿部家は江戸時代初期に入植したと伝えられ、庄内有数の大地主として隆盛を誇った。大正13年に農林省農務局（当時）が調査した『五十町歩以上ノ大地主』によると、阿部家の土地は田畑合わせて172町歩（約51.6万坪、東京ドーム36～37個分）で、庄内地方の地主では４番目に広いという記録が残る。

徳三郎は入植祖先から数えて11代目にあたり、旧制荘内中学校（現・鶴岡南高校）を卒業後、勉学のため上京し、東京帝国大学（現・東京大学）大学院に学んだ。ドイツ留学の経験も持つ。第二次大戦中に一時、参謀本部に勤務したのち、戦後は帰郷して教鞭をとった（文化交流館資料より）。

阿部徳三郎・ユキ子夫妻をライシャワー夫妻が挟む格好で写したショット。玄関上の「歓迎」の木看板は、ライシャワー一行の来訪に合わせて掲げられた。出典：「アトク先生の館」展示室の写真を、筆者がお借りして撮影

なお、徳三郎も会員であった日本村落研究学会誌に寄せられた追悼文を読むと、徳三郎は山形大学では専ら非常勤講師であった。つまり、“大学教授”のような、いわゆる定職（専任教員）ではないということだ。その理由は定かでないが、専任教員になると、講義だけでなく、ゼミや会議など大学で多くの仕事（学務）がある。場合によっては大学内の勢力争いに巻き込まれることもある。阿部家は、戦後の農地改革で土地の大部分を失ったとはいえ、相応の資産家であったことから、徳三郎は、食うに困らぬ程度であれば、好きに学び、好きに教える人生を選んだのかもしれない。

ライシャワー駐日大使がやって来た！

昭和40年３月、米国駐日大使･ライシャワー夫妻一行が、農地改革に関する視察調査のため、山形県を訪問し、阿部家にも立ち寄った。しかし、この史実に関する資料は極めて少ない。そのため、平成21年、町長や地元有志らが集まり「米国駐日大使ライシャワー氏の訪町を尋ねる集い」を開催したが、残念ながら有力な情報は十分に集まらなかった（「集い」の会議録より）。当時、地元で誰が同席し、何が話し合われたのかは、今もなお不明である。

会議録では、大使の受け入れは、徳三郎が親戚や使用人らとすべて行い、集落や役場などが協力した事実はないとある。語学に堪能な徳三郎だからこそ可能だったことであり（ユキ子夫人も英文学者の娘として語学に堪能）、それについては感謝をしているものの、一方で今後、同様のことが生じた場合に、どう対処すべきか（後世に記録を残すか）を考えなければならないと結んでいる。

徳三郎のもとを訪れた著名な外国人として、もう一人忘れてはならないのが、ベストセラー『ジャパン・アズ･ナンバーワン』（1979年）を著した米国の社会学者、エズラ・ヴォーゲル氏であろう。社会学にも造詣が深い徳三郎とは話が弾んだと思われ、訪問時の写真は建物の展示室で見ることができる。

「おくりびと」のロケ地となる

平成６年に徳三郎が亡くなった後、家族が別に家を建てる際、平成10年に町が買い上げた。その辺りの経緯について、建物を管理する三川町教育委員会の鈴木武仁・社会教育主査兼係長は、「阿部邸宅の歴史や佇まい、庭園の美しさは、現状のまま後世に保存していく価値があり、また、教育的施設として多面的な活用が図られると判断し購入にいたったそうです」と話す。

その後、建物は改修を経て、平成11年８月に、三川町文化交流館として再出発を果たした。「アトク先生の館」という名称は公募で決められた。

さて、ある時、映画『おくりびと』の製作スタッフから電話が入った。映画のロケ地に使えそうな場所を紹介してほしいという。その電話を受け、「アトク先生の館」などを紹介したのが、当時、商工観光係にいた鈴木さんだった。町を訪れたスタッフは「アトク先生の館」を気に入り、ニューハーフの納棺の儀など、いくつかのシーンが撮影された。

当時の様子について、文化交流館資料には、「撮影が始まる頃になると、スタッフが撮影開始を大声でふれて歩き、非常に緊張した一瞬だった。撮影時はさながら映画村のようだった」と書かれている。

愛着と生きがいを持って管理

「アトク先生の館」は現在、三川町山野草愛好会が町からの指定管理を受け、管理・運営を行っている。実は、「アトク先生の館」は庭園も立派であり、愛好会の男性は主に庭の手入れ、女性は主に受付や館内清掃などを行っている。毎年ゴールデンウィーク（５／３～５）に開催される「春の野草を観る会」は、愛好会が中心となる自慢のイベントの一つだ。なお、公民館に準ずる施設ではあるが、見学は自由である（無料）。

また、事務室の掲示板には管理人マニュアルが貼られ、朝の開館準備から、来館者･電話応対、閉館後の後片付けまで、約30項目がびっしりと書かれている。年間の来館者数は約2,200人程度だが、取材を傍らで聞いていた受付の女性スタッフは、「誰も来ない日もあるが、掃除に手を抜くことは一切ありません」と言い切る。確かに館内はピカピカで塵一つ落ちていない。

鈴木さんは、「愛好会には生前の徳三郎先生をご存知の方も多く、皆さん愛着を持って『アトク先生の館』を管理・運営されている。また、それ自体が、愛好会の皆さんの生きがいにもつながっているようだ」と話す。それに大きくうなずく女性スタッフの姿も印象的であった。

正直なところ、知名度はあまり高くないが、訪れる価値は十分な「地域の宝」である。

（東北公益文科大学特任講師・山口泰史）

日本映画初の米アカデミー賞外国語映画賞を受賞した『おくりびと』のポスター（館内展示）にもなった、納棺の儀のシーンは、この大広間で撮影された。（筆者撮影、合成）